Certificate Programme on Nature Conservation

自然保護寄附講座

Newsletter

No. 5
Mar 20, 2019

IUCN(国際自然保護連合)インターンシップレポート

国内インターンシップレポート

サイエンティフィック・ジャーナリズム成果レポート

災害とレジリエンス
～第３回アジア・太平洋地域の遺産保護における
自然と文化の連携に関するシンポジウム・人材ワークショップ

筑波大学
University of Tsukuba

Table of contents

03　IUCN（国際自然保護連合）インターンシップレポート
ー自然保護について考え、議論し、行動し続ける
人間総合科学研究科 博士前期課程 2 年　藤井 郁乃

04　国内インターンシップレポート
ー自然保護に関わる仕事を体験する

環境省	生命環境科学研究科 博士前期課程 I 年	松田 直樹
知床財団	人間総合科学研究科 博士前期課程 I 年	瞿　芳馨
トヨタ白川郷自然學校	生命環境科学研究科 博士前期課程 2 年	崔　悦朶
トヨタ白川郷自然學校	生命環境科学研究科 博士前期課程 I 年	海老沢 裕徳
農林水産省 林野庁	人間総合科学研究科 博士前期課程 I 年	岡本 奈緒美
飯能市	人間総合科学研究科 博士前期課程 2 年	張　新語

06　サイエンティフィック・ジャーナリズム成果レポート
「気づいて」、「触れて」、「感じる」ことが地域を豊かにする：
筑波山梅林の復興の例から　生命環境科学研究科 博士前期課程 2 年　阿部 紘平
キプロス島の持続可能性：エネルギーの未来へ
人間総合科学研究科 博士後期課程 3 年　Xanat Vargas Meza

10　災害とレジリエンス
〜第 3 回アジア・太平洋地域の遺産保護における
自然と文化の連携に関するシンポジウム・人材育成ワークショップの報告
芸術系　吉田 正人・稲葉 信子・イシザワ マヤ

11　Message from Switzerland!
ー国際的かつ多様な環境で自然保護と向き合う
人間総合科学研究科 博士前期課程 I 年　山口 諄也

筑波大学は、個人の篤志家からの寄附により、大学院生を対象とした寄附講座（サーティフィケートプログラム）を、平成 26 年度から開講しています。この寄附講座では、自然と文化にまたがる学際的な知識と、国際的な経験をもとに、自然保護に関する国際機関や国内機関、国際援助機関などで活躍する人材を育成することを目指しています。各ページのグレーマークは自然保護寄附講座の科目名です。

伊豆諸島式根島周辺に生息する美しいミドリイシ属のサンゴ。サンゴは生物多様性を生み出す源として知られているが、海洋酸性化の影響が指摘されている。二酸化炭素の噴出サイトがある式根島は、サンゴが海洋酸性化にどのように応答するのかを明らかにする鍵を握る研究サイトである。

Cover photo by 下田臨海実験センター技術職員　大植 岳

IUCN（国際自然保護連合）インターンシップレポート

自然保護について考え議論し、行動し続ける

IUCN 世界遺産プログラムチームメンバーと。（写真右端が筆者）

人間総合科学研究科
世界遺産専攻 M2
藤井 郁乃

世界遺産 アルト・ドウロ・ワイン生産地域内にて

自然保護寄附講座の海外インターンシップ制度を利用し、2017 年 2 月から 2018 年 7 月まで国際自然保護連盟（IUCN）のインターンシップに参加しました。IUCN はスイスに本部を置く世界最大の自然保護組織で、世界遺産の自然遺産に関する審査とモニタリングを担当するユネスコの諮問機関でもあります。私は世界遺産プログラムチームに所属し、第 42 回世界遺産委員会の運営サポートなどの業務を行いました。

世界最大の自然保護組織で学んだ6ヶ月

IUCN で過ごした 6 ヶ月間は、私の人生の中で最も充実し、様々な物事において新しい視点をもたらしてくれたものでした。世界遺産委員会の運営サポートや IUCN が公開する World Heritage Outlook など幅広い業務に従事させていただく中で、自然保護政策は多くの国や組織の関係性の上に成り立つものであり、最適解は時代や状況によって異なることを痛感しました。「自然保護」という正解のない分野で、考え続け、議論し続け、行動し続けることの重要性を学び、そしてそれを実践している人々の背中を見ることのできる貴重な機会でした。IUCN の本部はラムサール条約事務局、WWF 事務局と建物を共にしています。IUCN のメンバーだけでなく、自然保護に関わる人々と組織のつながりを超えて交流できたのも大きな財産となりました。

ポルトガルの地でジオパークを幅広く学んだ10日間

海外インターンシップの一環で、2018 年 7 月にポルトガルで開催されたユネスコ主催のジオパークサマーユニバーシティに参加しました。世界各国から集まった研究者らと議論やフィールドトリップを重ねる濃密な 10 日間でした。

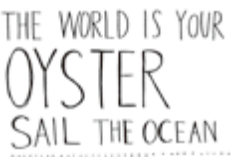
今回会場となった地区には、アルト・ドウロ・ワイン生産地域という世界遺産があります。18 世紀に人々が山をダイナマイトで爆破し、石積みを築き、見渡す限りのぶどう畑へと開墾した場所です。ジオパークという保護制度の観点からすると、人々が人為的に自然を作り替えた場所であるために評価が難しいですが、文化的景観としては唯一無二の価値が認められています。そのため、ドウロ地区では石積みのぶどう畑は世界文化遺産に登録する一方で、周辺で貴重な地質遺産を有する地域はジオパークに加盟するという方針をとっています。制度を相互補完的に利用するという観点は非常に興味深いものでした。

ジオパークを題材に執筆した修士論文は、30 年度の世界遺産専攻・最優秀論文賞をいただきましたが、この経験が論文執筆でも大きな糧になりました。

社会人経験を経てからの大学院進学

私は 4 年間の社会人生活を経てから大学院に進学をしました。キャリアを止めることや貯蓄に関する心配も少なからずありましたが、今はこの選択をして心からよかったと思っています。

私の場合は自分の現場経験と比較をしながら講義やインターンシップに参加できたことが理解の促進につながりました。幅広い経験が、思わぬところで自分の研究活動の糧になってくれることを知りました。来年度は博士課程に進学する予定ですが、自然保護寄附講座で学んだ知識や経験を、より質の高い研究に昇華させていきたいと思っています。



IUCN 勤務の最終日に同僚にいただいた言葉。大海に漕ぎ出てみると、まだ見ぬ大きな発見が待っているかもしれません。

藤井さんのインターンシップ中の詳細レポートは自然保護寄附講座公式 HP へ

#01 環境省 希少種保全推進室

生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 M1　松田 直樹

「希少野生動植物と生息地の保全の必要性を感じる」

私が環境省におけるインターンを志望した理由は、環境省における自然環境の保全に関わる業務が、生物多様性や環境の保全にどのように結びついているのかを知りたいと考えたからです。体験先である希少種保全推進室は、種の保存法に基づく国内希少野生動植物種の指定や保護増殖事業の実施において中心的な役割を担っています。

私が担当したメインの業務は、かつて日本全国に生息していた絶滅危惧種のトキの保全に関する業務でした。2008年の佐渡島でのトキの放鳥から、2018年が10周年となります。その記念式典と、中国から新たなトキが贈呈されるイベントが決まり、これら2つの大きなイベントに関わる書類作成を行いました。携わった書類の中には中国の日本大使館に送る書類もあり、そのスケールの大きさに緊張もしましたが、同時に大きなやりがいを感じました。現在野生トキの推定個体数は約350羽（放鳥トキ情報）と着実に増えており、「野生絶滅」から「絶滅危惧ⅠA類」へのランク引き下げの話も出ています。業務を通じてトキの保全の歴史やその努力と苦労の背景を学ぶなかで、トキの保全は良い方向に向かっていると感じました。

このほかにも保護増殖事業対象種（ライチョウとイヌワシ）の会議への出席など、多岐にわたる業務を体験したことで、希少種やその生息地等の保全業務の必要性をより強く感じ、今後自然環境の保全に携わりたいという想いはより強いものとなりました。

自然保護寄附講座（陸域フィールド実習１）にて、ヤマネの巣箱を観察しているところ

#02 知床財団ー羅臼ビジターセンター

人間総合科学研究科 世界遺産専攻 M1　瞿 芳馨

「世界遺産の知床で保護と管理を体験する」

この度私は自然保護寄附講座の支援をいただき、9月3日から9月30日まで、知床財団羅臼地区事務係の拠点施設である羅臼ビジターセンターにインターンシップに行ってまいりました。

私は、来館者の対応や展示物・掲示物の作成業務を中心に行いました。また、ルサ川河口にあるルサフィールドハウスで秋に開催されるルサカフェというイベントのサポートや、財団の職員の方々との草刈り（外来種駆除）、柵作り、クジラひげ処理などの作業も行いました。羅臼ビジターセンターは一つの固定された仕事だけではなく、室内と野外を合わせ、様々な仕事ができる職場でした。そのため、インターンシップは飽きることがなく、毎日楽しく、充実していました。

今回のインターンシップを通して、地域交流および自然保護活動の場へ参加をさせていただき、色々な仕事を体験することができました。とても有意義な時間を過ごすことができたと思います。私は世界遺産について研究しています。世界遺産である知床の保護と管理について、地域の民間組織はどのように運営されているのか、自分の目で見て、自分の体で体験し、直接感じることができたことが大きな収穫でした。最後に、温かく受け入れて下さった羅臼ビジターセンターの皆様、お世話になった全ての方々に心より感謝申し上げます。

#03 トヨタ白川郷自然學校

生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 M2　崔 悦朶

「環境教育プログラムを主催者側の視点で見る」

私は7月31日から8月10日にかけて10日間トヨタ白川郷自然學校のインターシップに参加しました。今回私が配属されたのは、“田舎暮らしキャンプ”でした。私はキャンプのサポートスタッフとして18名の子供たちと一緒に6日間過ごすことになりました。“田舎暮らしキャンプ”は、子供たちと一緒に自然學校特製の『合掌テント』を組み立て、そこで子供たちが寝泊まりし、川や野山で遊んで食べて楽しむプログラムです。子供たちの自主性を重んじるため自由度は高く、その反面、安全管理のハードルも高いです。

私の役割は主に写真撮影と安全管理でした。実際行ってみると、やはり子供たちの活動をサポートする楽しさもありますが、安全管理の難しさもありました。スタッフが初対面の子供たちが協力できるような環境を作る一方で、活動では子供たちの自主性を重んじるゆえ、体調不良や怪我などのリスクが高くなります。私とスタッフの方々はあらゆる危険を予測し、計画をたて、子供たちが自然を楽しめる環境を作るために絶え間ない努力をしました。

今回のインターンでは、キャンプの運営の仕方や流れ、普段見られない裏側を見られて大変勉強になりました。それと同時に、私も将来環境関連の仕事に就く際、主催者側としてこういった環境教育を広めるためのプログラムに何が必要かを考えさせられました。最後に、このような機会を提供してくださったトヨタ白川郷自然學校、自然保護寄附講座の皆さんに心よりお礼申し上げます。

自然保護に関わる仕事を体験する

#04 トヨタ白川郷自然學校

生命環境科学研究科 地球科学専攻 M1　**海老沢 裕徳**

「都会の企業では体験できないような働き方を学ぶ」

トヨタ白川郷自然學校は世界遺産である合掌造り集落がある岐阜県白川村にあります。白川郷に遊びに来た人に自然と伝統文化を融合させたアクティビティを提供することで、来ていただいた方に白川郷ならではの体験を持ち帰っていただくことを目的に運営されています。自分はこの自然學校で 10 日間インターンシップを行いました。主な活動としては、自然學校に遊びに来たお客様へのプログラム運営補助を行いました。具体的には、気候性地形療法（ドイツの気候のクアオルト（療養地）で取り組まれている心臓リハビリや高血圧、骨粗しょう症等の治療に利用される自然療法）を体験するツアーや火おこしの補助などです。

自分が一番記憶に残っているのは、外国の団体客向けに「合掌テント」の設営やアウトドアプログラムの対応を行ったことです。この団体のお客様とは同行する機会も多く、お客様に名前を覚えていただくことが出来て非常にうれしかったし、一番記憶に残りました。その中で、野外活動のため危険が伴うアウトドアプログラムを実施するには綿密な計画と準備、そして安全対策が必要であるということを感じました。また、スタッフの自然に関する知識量や自然を大切にする気持ちは高く、このような実地で自然保護とは何かを学び技術を身に着けた人が、日本の自然保護を支えていくのではないかと思うし、そうであるといいと思いました。

自分はこのインターンシップで都会の企業では体験できないような働き方を学べたので本当に良かったと思います。ぜひ来年もこの自然學校にインターンシップに行ってくれる人がいることを期待します。

#05 農林水産省林野庁

生命環境科学研究科 地球科学専攻 M1　**岡本 奈緒美**

「林業や自然のもつ機能への学びを深める」

私は農林水産省林野庁本庁、森林整備部計画課海外林業協力室という部署にて 2 週間にわたり、インターンシップに参加する機会を頂きました。海外林業協力室は、日本の林業の歴史の中で培われてきた植林や治山等の技術の海外への発信を含む、途上国への技術協力や、気候変動に関する国際的な適応・緩和策に関する事業を実施するなど、林野庁における国際協力を担う部署です。

インターンシップでは主に、「途上国における防災・減災」についての資料収集・アイデアの醸成というプロセスを体験させていただきました。レポートの作成にあたり、林業や治山事業に関する動向やそれらの活かし方、過去の防災・減災の事例等、様々な方からの経験談やアドバイスを頂きました。

今回のインターンシップは業務の一部を体験するのみならず、林業や自然のもつ機能への学びを深めるというものだったように思います。特に、自然をただ保護するだけでなく、人の手を入れて整備していくことで森林の回復力を補助し、持続的なものにするという考え方や森林を利用した防災・減災という考え方はとても新鮮でした。また、インターンシップを通して、自分のやりたいことや多くの未熟な点に気づくこ

とができました。今回のインターンシップでは様々なことを学ばせていただきましたが、これらを無駄にせず、しっかりと今後の生活に活かしていこうと思います。

このような機会を与えてくださったすべての方々に心から御礼申し上げます。

#06 飯能市観光・エコツーリズム推進課

人間総合科学研究科 世界遺産専攻 M2　**張 新語**

「エコツアーを通して地域の宝物を発見する」

私は 2018 年、飯能市役所の観光・エコツーリズム推進課にて 10 日間のインターンシップをさせて頂きました。飯能市は埼玉県の南西部に位置し、2004 年からエコツアーを継続的に行っています。そこで、エコツアーの仕組みを知り、地域の人々と交流するため、市役所の方と一緒に住民の方たちが開催している様々なエコツアーに同行しました。エコツアー中、地元のガイドの方が解説している様子や、様々な地域から来た参加者が活動している様子を撮影したり、ツアー中で気をつけるべきところを記録したりするのが私の主な仕事でした。以前はいつも参加者としてエコツアーに参加していましたが、主催者側からエコツアーに参加するのは初めてでした。事前にガイドの方と一緒に準備をしたり、スタッフとして仕事を頼まれたり、ツアーの後に市役所の方とガイドの方と一緒にツアーを振り返ったりして地元の方々とうまくコミュニケーションが取れるようになると、とても信頼して頂いている感じがしました。そして、エコツアーを通して、飯能を PR しているガイドの方や市役所の方々の地元に対する愛情と誇りも強く伝わってきました。

今回のインターンシップを通して、詳しく説明していただいたガイドの方のおかげで、飯能市の新しい発見がありました。また、見慣れた環境から地域の宝物を探し、そしてそれをエコツアーとして発信することの大変さと大切さも実感しました。さらに、外国人である私に日本の風俗や伝統を教えたり、忘年会などに誘ってくださったりして、私と飯能の皆さんとの繋がりが強くなったことを感じました。最後に、このような機会を与えくださった飯能市役所と自然保護寄附講座の皆様に心より御礼申し上げます。

6 名のインターンシップ詳細レポートは自然保護寄附講座公式 HP へ

「気づいて」、「触れて」、「感じる」ことが地域を豊かにする：筑波山梅林の復興の例から

生命環境科学研究科 地球科学専攻 M2　**阿部 紘平**

筑波山梅まつりと梅林

今年で45回目を迎える筑波山梅まつりが、2018年2月14日から3月21日の約1か月の間開催された。メイン会場である筑波山梅林内には白梅・紅梅・緑がく梅などの梅が約1000本ある。関東近郊の梅の名所として知られる茨城県水戸市の偕楽園の梅とは異なり、筑波山梅林では剪定によって樹高が低く抑えられている。そのため、文字通り目の前にある梅の花（写真1、2）を見て、香りをかぎ、散策することができる。

写真1　園内の梅（筆者撮影）

写真2　園内のろう梅（筆者撮影）

また、茅葺の展望四阿（あずまや）からは一面に広がる梅の花を望むことができ、春の訪れを感じるとともに気持ちも明るくさせてくれる。さらに筑波山周辺の田園風景、好天時には富士山や東京スカイツリーまで見ることができ、開放感もある。これらも展望四阿からの景色の魅力である。期間中は梅茶のサービスも行われており、園内で行われるお茶会に参加すれば梅に包まれながら抹茶を楽しむこともできる。筑波山の名物であるガマの油売り口上も見ものである。

筑波山梅林は、1965年に市が梅を特産品とするために既存の松林を開墾して3000本ほどの梅の木を植えたのが始まりとされている（詳細な資料は残されていない）。しかし、その後の人手不足により管理が行き届かなくなったため、梅林は過密状態となり、枝は迷走し、下枝にいたっては枯死してしまうなど、ひどく荒れている状態だった。梅まつりも1970年代から始まっていたが、梅の花の期間のみ若干にぎわう程度だったという。

そこで、2000年に当時のつくば市長が観光事業の一環として、この梅林を再生するプロジェクトを立ち上げた。これより約10年という歳月をかけて再生されたのが現在の筑波山梅林の姿である。

地域の力で取り組んだ筑波山梅林再生プロジェクト

私は自然保護寄附講座で学ぶ中で、高山植物や農作物が野生動物によって受ける獣害を防ぐ取り組みや、各地のジオパークを維持し、その価値やすばらしさ、面白さを伝えようとする取り組みに関わる人々、また自然に触れその楽しさを伝えようとする人々の熱意や苦労を知っていった。それを通して、ある自然を保護するということは、保護したい自然に対する、地域の人々の認識や関わり方が重要だということを感じていた。そんな中、「生態系の保全と復元」という授業における講義での、筑波大学名誉教授である鈴木雅和先生のお話に非常に興味を持った。それは、筑波山梅林再生プロジェクトについてのお話で、手入れが行き届かずに荒れ果ててしまいそうだった、梅林というつくばに古くからある魅力ある地を、つくば市に暮らす人々が再生して守ったというプロジェクトだった。

これはまさに、今自分が重要だと感じていたことそのものだと思った私は、今回この筑波山梅林再生プロジェクトを取り上げ、プロジェクト立ち上げ当初に市役所職員として担当された渡邊俊吾さん（現：つくば市経済部産業振興課）と、現在梅林の管理を担当する貝澤毅さん（現：つくば市経済部観光推進課）にお話を伺うことにした（写真3）。

筑波山梅林再生プロジェクトは、つくば市と筑波大学が共同という体制で進められた。筑波大学からは鈴木雅和先生を中心とした3人の先生方が、市役所からは前述の渡邊俊吾さん（当時は、つくば市商工観光課）が担当となり、筑波山梅林の再生に取り組んだ。このように官学が共同となって一つのことに取り組むという体制は当時としては非常に珍しく、つくば市としても初の試みであった。

冒頭にも述べた通り、当時の筑波山梅林は梅の花が咲いている約2、3か月の間しか注目されていなかった。しかも、手入れが行き届かずに方々に伸び放題となった梅の樹は、このままでは花も咲かなくなるのでは、ともいわれていた。そこでプロジェクトでは、梅の花がこれからもずっと咲き続け、そして花が咲いていない新緑の時期や実のなる時期にも楽しめる梅林を目指すこととなった。そのために最初に取り組んだのは、伸び放題となってしまった梅の樹の大規模な剪定作業であった。

東京出身で就職を機に茨城に移り住んだ渡邊さんが梅林再生プロジェクトの担当者となったのは、入職からまだ5年目のときだった。若くて、林業や農業の知識もなかった渡邊さんは、プロジェクトの計画そのものには意見を出せるような立場にはなく、プロジェクトは先生方が主導となって進められた。

渡邊さんは当時の様子を次のように語ってくれた。「剪定といっても、盆栽を扱う時のような小さなハサミではないのです。信じられないかもしれませんが、チェーンソーで太い枝もバッサバッサと切っていきました。最初は、本当にこれで再び元気に咲くようになるのか、咲かなくなるのではという不安も大きかったです」。プロジェクトが始まった最初の3年くらいは、渡邊さんと同じように、不安を感じた市民の方々からの苦情も非常に多かったという。

梅の樹の特徴や剪定なども含めて、専門知識は先生方から常に教わる日々だった。それでも自分にも何かできることはあると考え、予算の確実な確保や、通常は業者さんが記録する事業記録書の作成を行い、また梅林を心配する市民の苦情にも対応するなど、先生方がプロジェクトを進めやすくなるように奔走した。

しかし、そうした日々を送る中で変化が起こる。「先生方から教わって、梅について少しずつ知っていくと、梅に対する興味が湧いて、面白いな、楽しいなと思うようになったんです。そうしたら次は、実際に剪定をやってみたくなりました」。そう思った渡邊さんは小さなハサミを使って、しかもあまり目立たないところで、実際に剪定をやってみた。「するとこれが意外と楽しくて、自分でやったものをお客さんに見てほしい、そう思うようになりました」。

そのように感じた渡邊さんは梅まつり期間中も剪定をしに現地に赴いた。その姿に気づいたお客さんから梅について尋ねられることもあった。その時は梅の性質や特徴、剪定の仕方、自分で梅の木の世話をして感じた楽しさを伝えた。また、自分が剪定した樹から咲いた花の香りをかいで楽しんでいるお客さんの姿を目にすることもあった。梅林を訪れたお客さんがどのような反応をしているのかを実際に見ることができて、渡邊さんは非常にうれしくなり、またそこにプロジェクトのやりがいや梅林を復活さ

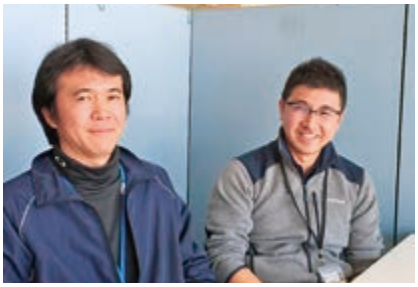


写真3　お話を伺った渡邊俊吾さん（左）と貝澤毅さん（右）

学生たちが思い思いにテーマを選び、自ら取材を行って、プロフェッショナルサイエンスライターの直接の指導を受けながらその内容を記事にまとめました

せたい、という思いを強く感じるようになったという。

また、自分で梅に触れて作業をするという経験を通して、あるアイデアが生まれた。それは梅の苗木の販売である。都心部の人やあまり植物に触れる機会がない人たちも、実際に梅のお世話をやってみたら面白いと思ってくれるのではないか、もっと梅林に足を運んでくれる人が増えるのではないかという考えからだった。これは好評だった(現在は実施されていない)。

さらに、より梅を感じることができる企画はないか、と考えるようになった。例えば、収穫した梅の実を使った梅干し作り体験や、剪定した枝を用いた草木染体験などができるようなれば、梅をもっとたくさん、そして通年で楽しんでもらえるのでは、と思いついた。

その他にも先生方を中心にプロジェクト全体で様々なアイデアが提案された。実は万葉集には筑波山を詠んだ歌が16首と、富士山よりも多く詠まれている。そこで、古くから人々に親しまれてきた筑波山を通して、「にっぽん」を感じることができるスポットとして筑波山梅林を整備することが計画された。日本に古くからある萩や紫陽花などを植えたり、つくばに現存する古民家を梅林近くに移築し宿泊施設としたりするなどのアイデアが生まれた。茅葺の展望四阿もこうしたアイデアのもとに作られた。

成功したプロジェクトと役所としての課題

数年に及ぶ取り組みの結果として現在の梅林がどのように生まれ変わったかは冒頭に述べた通りであり、その姿はプロジェクトの成功を示している（写真4)。しかし、その一方で梅干し作りや草木染の体験、古民家の移築など、当時の計画の中には実現できなかったものもある。

プロジェクトが一通り完了するまでの約17年の間に、渡邊さんも含めて数年おきに市役所の担当者が入れ替わり、計5～6人がこのプロジェクトに携わった。現在の担当者である貝澤毅さんは、次のように話す。「当時の計画書が5年の保管期限を過ぎたことで処分されてしまったのです。後任の担当者は当時目指していた詳細な計画が分からないまま引き継いでいったため、計画が少しずつ変わってしまっています。この点は役所としての反省点であり、課題点です」。いまでも、日本を五感で感じることができる梅林にするという当時のコンセプトはできるだけ残し、本筋は外れないように管理しているものの、担当者の入れ替わりと計画書の保管期限のために詳細は分からなくなり、どうしても当初の計画から少しずつ変わっていってしまう。

しかしだからと言って、変わることが全くもって悪いことだ、とは言い切れないと渡邊さんは言う。「時代が変われば良いとされる考え方も変わるし、なにより、担当している職員にはそれぞれ、やらなければならないことや、熱意をもってやりたいことがあります。それらに自由に取り組むために、時には過去の計画が分からない方がやりやすい場合もあります。それでも、プロジェクトを通して一本の道筋が通っていることは重要です」。

現在、貝澤さんは梅まつり期間外にも筑波山梅林や周辺地域を楽しんでもらえるような整備計画を練っている。梅林の麓に整備した森林体験パークフォレストアドベンチャーはその計画の一つである。

このように、計画そのものは当初から少しずつ変わってきてしまったかもしれないが、渡邊さんから始まった筑波山梅林への思いやプロジェクトに対する熱意は、確実に引き継がれている。だからこそ、私たちは今日の美しい梅林の姿を見ることができるのだ。

地域にとっての魅力

プロジェクト発足当時、地元の人にとって筑波山梅林はそれほど大きな魅力ではなかったようだ。「実際、職員の中には梅林を“あんなもの”と表現する人もいました。ですがそれは裏を返すと、筑波山や梅林は市民にとってそのくらい当たり前の存在だったということです」と渡邊さんは話す。貝澤さんも次のように話している。「私は趣味で登山をするので、筑波山にはよく登ります。しかし、同じ市内出身者でもそうした趣味がない人にとっては、眺めはするけれど、登る山ではないという認識のようです」。

そんな状況で、筑波山という自然の存在を新鮮に捉えることができた渡邊さんのような市外出身者の視点は、梅林の再生プロジェクトを柔軟に進める上で重要だった。

プロジェクト開始から5年ほど経って、渡邊さんは担当を次の人に引き継ぐこととなってしまうが、梅への思いは持ち続けている。当時実際に触れ、作業をすることで学んだ梅の剪定作業は今でも覚えているという。

「プロジェクトに取り組む先生方との日々が新鮮で、あらゆることが非常に勉強になりました。なにより、取り組んでいて自分自身が楽しかった。その時に学んだ考え方、楽しかったという経験はその後の仕事にも生かされています」と最後に渡邊さんは話してくれた。

「気づいて」、「触れて」、「感じて」、「伝える」

今回のインタビューを通して印象的だったのは、筑波山あるいは梅林に対する地元の人と地元外の人の視点・認識の差と、その差があったからこそ生まれた、地域の魅力に対する気づき、さらには実際に梅という自然に触れることで楽しさや面白さを感じ、それをみんなにも感じてほしいと思うようになったという渡邊さんの体験談だった。

どんな地域にも魅力はある。鍵となるのは、それに気づくことができるかどうか。気づくことで初めて、それを守り、維持しようという思いが生まれるからだ。当時の市長や市外出身の渡邊さんが、筑波山梅林の魅力に「気づき」、プロジェクトに熱心に取り組むことがなければ、梅林も今頃は枯れてしまっていただろう。

また、単なる知識としての重要性ではなく、実際に触れて感じることから得られる感覚というのは、最初の気づきになりうるだけではなく、その気づきを人々に伝播させる上で大きな原動力ともなる。自分が体験して楽しいと思うことで地域の魅力に気づく。そして楽しかった思い出は人に伝えたくなる。そうした気づきと楽しさが連鎖して、地域の魅力の発信と維持に結びつく。

本記事で「気づくこと」と「触れて感じること」の大切さを少しでも伝えることができていたら幸いである。

筑波山梅林は現在、通年で楽しめるように、さらに梅林を足掛かりに筑波山全体を楽しんでもらえるように新たな案を計画中だ。知らなかった方や訪れたことがない方はもちろん、訪れたことがある方も、筑波山、そして梅林に是非足を運んでみてはいかがだろうか。その一歩は皆さんの地域や心を豊かにする新たな「気づき」に導いてくれるかもしれない。

写真4　展望四阿から見た梅林とつくばの街（筆者撮影）
少し時期が早かったため、梅はまだ咲始めたばかり。

キプロス島の持続可能性：エネルギーの未来へ

人間総合科学研究科 感性認知脳科学専攻 D3　**Xanat Vargas Meza**

健康的な環境、経済的繁栄、社会正義は、現在と将来の世界のすべての人類にとって達成可能でなければならない。それが持続可能性の目標だ。地理的に隔離されているため、「島」にとって、持続可能性は大きな課題だ。しかし、逆境から得策が生まれることもある。たとえば、日本の瀬戸内海にある淡路島は、1995 年の阪神・淡路大震災の震央にあったが、政府、企業、市民が一体となった取り組みを行ったため、現在、政府が定めるグリーン・エネルギー・プランを遂行できている。

地球儀を見ると、淡路島とほぼ同じ緯度に、島国、キプロスがある。地中海にあり、ヨーロッパと中東の交差点に位置している。キプロスは、厳しい気候と、政治的な葛藤の多い長い歴史を持つ。特に 2008 年から始まった予期せぬ石油価格の変動により、島の脆弱性が増した。政府の指導力は弱いが、国際協力と現地協力の組み合わせにより、キプロスは活性化されつつある。

このキプロスの最近の情勢について、セレン・ボガック先生にインタビューした。

キプロスの生活システムにおけるエネルギー：アギア・スケピのケース

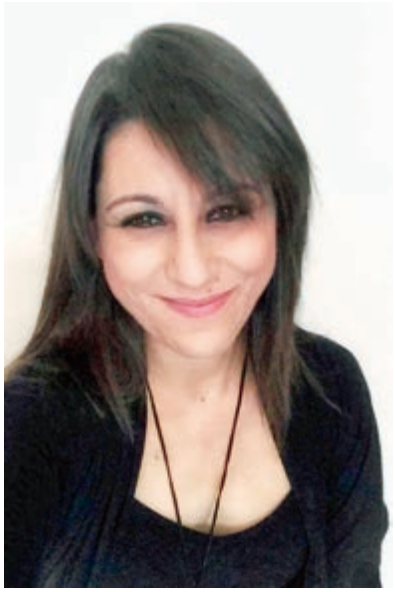
ボガック先生はキプロスにある東部地中海大学で副学長を務めた後、現在、同大学の建築学の教授だ。イギリスやチェコなどのヨーロッパ諸国で異文化間の対話と積極的な学習を研究した経歴も持つ。また、環境心理学の博士として、土地への帰着性や、人間と環境との相互作用を調べた経験もある。

キプロスでは、エネルギー管理は都市と農村の生活システムの維持に不可欠になりつつある。ボガック先生はまず、文化的な庭園ともいえる治療コミュニティ、「アギア・スケピ」という実例を教えてくれた。このコミュニティは、麻薬やアルコールの問題を抱えている人々をリハビリするだけではない。果物や野菜を栽培し、家禽を育てる有機農場としての側面も持つ。さらに、太陽電池パネルにより電気を確保し、風力発電も試験もしているという。ボガック先生によると、新しいエネルギー技術の開発は、石油会社の専門家や市民など、島の様々な関係者も参画して行われている。

キプロスのグローバル・エコシティの発展：エコロジー・プロジェクト

ボガック先生は、キプロスの都市、ファマグスタの例もあげた。かつてファマグスタは、観光産業で有名な街であった。しかし、1974 年のトルコの占領中に、バロシャと言う地帯が立ち入り禁止地区となり、他の地域から隔離されることとなってしまった。島の 3 分の 1 程度を占めるバロシャは、トルコによって管理されてきた。国連は、1985 年以来、トルコにバロシャのキプロスへの引き渡しと、町の元の居住者のみならず、誰をも拘束することの禁止を要求している。しかし、平和協議はこれまで成功しておらず、バロシャは幽霊町と化してしまった。

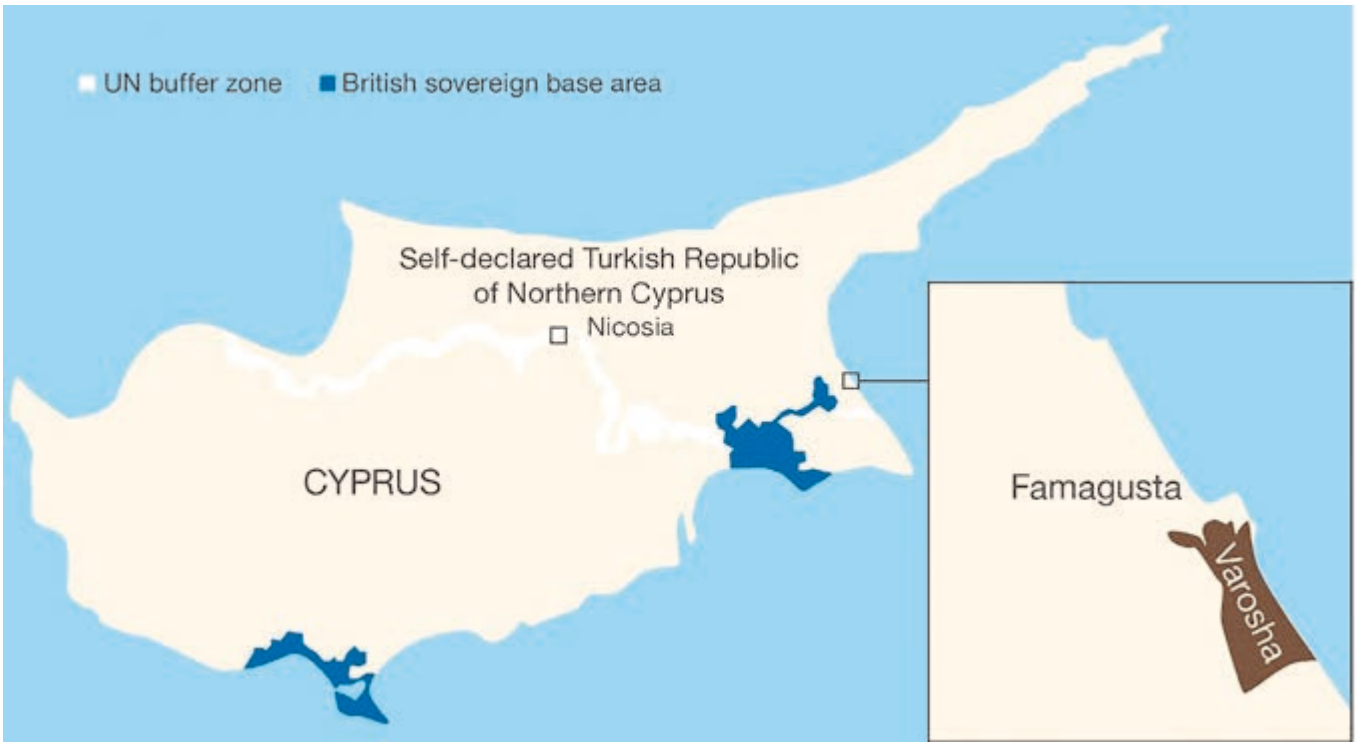
こうした状況を打開するために立ち上がった「エコ・シティ・プロジェクト」は、



建築学の教授と研究家のボガック博士

ファマグスタ市のオテロ城。都市のインフラストラクチャーには、島内の水不足にもかかわらず、ソーラーパネルと公共の庭園植物の水システムが含まれている。

学生たちが思い思いにテーマを選び、自ら取材を行って、プロフェッショナルサイエンスライターの直接の指導を受けながらその内容を記事にまとめました



島嶼国キプロスにはバッファーゾーンがある。（出典：Xanat Vargas Meza）

最新技術を使いながら、エネルギー的に孤立してしまったバロシャをファマグスタに再統合することを目指している。この目標を達成するために、ボガック先生も関わり、海外からの専門家と地元の大学生から成るプロフェッショナルチームは、デザインスタジオでグループ化されて、色々なアイデアを検討した。先生の計画書によると、人間と自然が共存し、再生可能エネルギー源に依存し、無駄をほとんどまたは全く生じさせず、安全性、エンパワーメント、責任、高品質な生活を提供する場として、彼らはグローバルなエコロジーを概念化した。太陽熱充電ステーション、熱と水のリサイクルシステム、輸送システムなど、様々な省エネルギー技術に関連するアイデアがあった。

ボガック先生は、エコ・シティ・プロジェクトの発展過程において、ギリシャとトルコから移民してきたファマグスタ市民の協力が重要であったことを強調した。プロジェクトに参加した地元の学生たちは多層的な問題を認識して、現状を修正する必要性を理解しなければならなかった。たとえば、古い家は政治家にとっては、無駄な土地資源になる可能性があるが、住人にとっては、所有権と愛着を意味する。ボガック先生によると、キプロスでは、土地資源が限られていて、エネルギー資源や廃棄物管理の問題があり、様々な動物種が絶滅の危機に瀕している。同博士は、「すべての関係者の間で意見を聞き、情報とアイデアを共有する必要があり、専門家は専門家の枠を超えて、人間として考えるべき」と語っている。つまり、エコ・シティ・プロジェクトの決定プロセスでは、すべての問題が政治と絡み合っており、キプロスにおける平和と協調が実現されるかどうかが重要なのである。

未来は社会に始まる

地域社会は、持続可能なイニシアチブと環境に優しい行動の導入に不可欠な役割を果たしている。阪神・淡路大震災の被災後、短期と長期のボランティアが急増した。また、淡路島のソーラープロジェクトが設立されたことも市民の取り組みによるものだった。エネルギーを節約し、地球の未来を守るために地元で活動しているキプロスと日本の人々は、持続可能性を模索するための素晴らしい実例である。

参考
http://www.vasiamarkides.com/eco-city/

Xanat さんの本レポートの英語版は
自然保護寄附講座公式 HP へ
(English page)

ICCROM ジョセフ・キング氏

IUCN ラディカ・ムルティ氏

ICOMOS ロヒット・ジグヤス氏

災害とレジリエンス

自然保護特別講義2
自然保護特別実習1

第3回アジア・太平洋地域の遺産保護における自然と文化の連携に関するシンポジウム・人材育成ワークショップの報告

芸術系　吉田 正人・稲葉 信子・イシザワ マヤ

修了証を授与されたアジア・太平洋地域の若手専門家と自然保護寄附講座履修生

2018年9月21日から10月1日にかけて、筑波大学において第3回アジア・太平洋地域の遺産保護における自然と文化の連携に関する人材育成ワークショップが開催されました。本ワークショップは、ユネスコ世界遺産センター、文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）、国際自然保護連合（IUCN）、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）の協力の下、筑波大学に設置された遺産保護における自然と文化の連携に関するユネスコチェアプログラムと自然保護寄附講座が共催したものです。

2016-2019年の4年間のプログラムの3年目は、災害とレジリエンスをテーマにワークショップが開かれました。ワークショップに参加した、アジア・太平洋地域の遺産保護に携わる中堅の実務経験者15名と自然保護寄附講座の履修生4名は、2011年の東日本大震災で地震と津波の被害を受けた東北地方を訪れました。世界文化遺産に登録された平泉を起点として、三陸復興国立公園の一部である南三陸町の志津川湾、特別名勝に指定された奥松島を巡りました。

東日本大震災における津波の高さについて話を聞く参加者

ワークショップは、9月21日につくばグローバルサイエンスウィーク（TGSW）の一環としてつくば国際会議場で開催された第3回遺産保護における自然と文化の連携に関するシンポジウムで幕を明けました。TGSW2018のテーマである持続可能な開発目標の一つとして、私たちは自然災害や人為災害を取り上げ、防災や災害からの復興における自然と文化の連携に焦点を当てました。有識者を交えた円卓会議では、東日本大震災後の復興プロセスや日本における文化財保護と災害対策についても議論されました。

環境省 奥田 直久 氏

文化庁 下間 久美子 氏

元ICCROM ガミニ・ウィジェシュリヤ氏

ICOMOSアドバイザー / ディーキン大学　クリスタル・バックレー氏

第4回ワークショップは「文化と自然が複合した遺産」をテーマに、富士山へのフィールドトリップを含めて、2019年9月～10月に開催予定です。

Message from Switzerland!

海外インターンシップ

国際的かつ多様な環境で自然保護と向き合う

人間総合科学研究科 世界遺産専攻 M1 **山口 諄也**

私は、自然保護寄附講座に多大なご支援を頂き、スイスのグランに本部を置く、IUCN（国際自然保護連合）で2019年2月から半年間の海外インターンシップに参加させていただいています。

日本からスイスまでは、ドバイでの乗り継ぎに要した7時間を含めて、丸一日かかりました。ジュネーブ空港に到着する直前には、窓越しに雄大なレマン湖が見え、更にはフランスとの国境を越えて旋回し、美しい夕暮れとモンブランを眺めることができ、長いスイス生活の始まりとしてはこの上なく素晴らしい景色でした。

現地では、グランから5km程のニヨンという町に住み、電車で通っています。グラン駅からIUCNの本部までは10分ほどで、駅周辺ではジュネーブなどの他の町へ通学や通勤に向かう人々を多く目にします。オフィスからはアルプスの山々を臨め、湖畔の公園ではリフレッシュすることも可能です。

IUCNは、6つのグループで構成されています。そのうちの1つ、World Commission on Protected Areas（WCPA）の世界遺産プログラムに私は在籍しています。今年6月末から7月にかけて、アゼルバイジャンのバクーで開催される、第43回世界遺産委員会に向けた準備を進めることが主な業務内容です。

IUCNが諮問機関として、世界自然遺産の保全に果たしている役割を肌で感じ、今後果たすべき役割について考えていきたいと思います。また以前から、いくつかの自然遺産ではオーバーユースによる自然環境への脅威が懸念され、対応が課題となっています。個人として、自然遺産の保全と観光などを含めた利用との両立を考えながら日々を過ごしたいと思っています。過去に短期間の留学経験はありますが、長期の海外生活は初めてですので、様々な困難にも立ち向かい、果敢に挑みたいです。

初日にIUCN本部のデスクで。いよいよインターンシップが始まります。

@自然保護寄附講座

@natureconserva1

SNS 更新中！

Photo: Li Xuanyu, Qu Fang Xin, Uribe Chinen Claudia Hatsumi, Masahito Yoshida, Masanori Take, Maiko Suda

自然保護寄附講座 Newsletter No.5
2019年3月20日発行
編集・発行 筑波大学大学院自然保護寄附講座事務局
〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学共同研究棟A202
(029)-853-6344
nature@heritage.tsukuba.ac.jp
www.conservation.tsukuba.ac.jp